

言葉がのどにひっかかってでてこない。

大家さんがにっと笑った。

「ま、ええ。三つ子の魂百までいいよる。お武家さんの家に生まれたんやんもんなあ。そのうち、なれるやろ」

宗一郎父子が、この長屋に越してきて、三年になる。

父親は武士の端くれだったが、仕える殿様の不祥事でお家がとりつぶしとなり、三年前に浪人になった。やさしいだけが取り柄の父親にかわって、家を取り仕切っていたしつかりものの母親は、武家屋敷を追い出された数日後、流行病のコレラにかかって、あっけなく死んでしまった。

行く当てのない父子が流れ着いたのがこの長屋だった。

大家さんがぶるっと大げさにふるえた。

「さっぶいなあ。桜が咲きそうやいうのに、いつんなつたら、暖こうなるんやろ。そやそや、仕事やった。ほんまになんでも引き受けるんやな？」

「はい。ほんまです。看板にいつわりはありませんよって」「いうたな？」

入り口の横には『よろず承り候』と書かれた大きな看板があがっている。なんでもやりますという意味だが、この長屋に住めると決まった翌日、父親がたすきを掛けて一気に書き上げたものだった。

数日後、飛び込んできたのが日雇いの人足仕事だった。

いきなりの力仕事に父親は、すぐに音を上げ、五日の約束

を三日で勝手に切り上げてしまった。

父親は読み書きに関した仕事を予想していた。ところが、頼まれるのは、風呂屋の薪割りや積荷の運搬などの力仕事ばかりだった。

両手をついて、ていねいに断る父親の言葉は堅苦しくて、言葉の端々に武士のおごりがにじんでいる。頼みにきた町人たちは不愉快になって、二度と父親を頼まなかった。

すっかり仕事のなくなった父親が酒のみだしたのは、そのころだった。酔いがさめると、正座して刀の手入れをしている。そんな父親をみていて、宗一郎はせめて、用心棒の仕事でも舞い込んでこないかと、密かに願っていた。

いつだったか、父親が宗一郎に向かって、

「仕事なら、なんでもせねばならん。よろず承りの看板が偽りになってしまふ……」

と、しみじみといったことがあった。

大家さんの仕事も、今なら父親は引き受けるだろう。

「大家さん、ちょっと待って下さい」

ぞうりをぬいで、奥の部屋へいこうとする宗一郎のそでを、大家がぐいっと引張った。

「宗一郎、これはな、おまえの仕事なんや」

「ええーっ、またですか？」

大家さんはときおり仕事をもってきてくれる。子守、そうじ、使い走りもあった。ありがたいけれど、子どもの仕